

みんなのデジタルリポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

アラスカ・ツィムシヤンの挑戦： メトラカトラの観光ツアー (FIELD NOTE)

メタデータ	言語: ja 出版者: 公開日: 2015-03-23 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 齋藤, 玲子 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/5619

アラスカ・ツィムシヤンの挑戦

—メトラカトラの観光ツアー—

さいとう
齋藤 玲子

(北海道立北方民族博物館学芸員)



八月一日午前九時二〇分。バババババババツ・・・、爆音とともに水上飛行機が小さな港に降りてきた。東南アラスカの太平洋岸には、多くの島々が浮かぶ。ツィムシヤン語で「穏やかな海峡」を意味するメトラカトラは、その一つアネット島にある人口一、七〇〇人ほどのコミュニティだ。この静かな村に次々と降り立つ観光客は、約二四〇名。離れた港町ケチカンから一五分足らずのフライトでやってくる。水上飛行機は定員が少ないため、四〇人の観光客は四機に分乗していた。

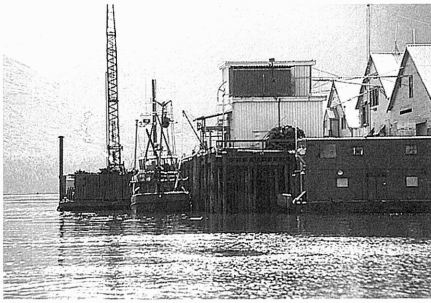
赤いフェルト地に黒いワタリガラスのアップリケのベストを着たガイドの女性、タラップから降り立つ人の手を取り、笑顔でバスに案内する。いつもはスクールバスとして使われている車両の行き先表示には「ファン・ツァー」の文字が掲げられており、現地から参加した私たちの調査メンバーが乗り込むと、もう満席である。

隣り合った中国系と思われる女性に「私たちは日本の民族学の研究グループで、一週間前からここに滞在しているのですが、皆さんはどこから？」と声をかけると、「アメリカ本土ですけど、住んでいるところはバラバラ。フォークダンス愛好会のメンバーとその家族や友人たちなのよ」との答え。

客たちのおしやべりを遮るように最後にバスに乗り込んだガイドは、こちらを向いて話し始める。「皆さんようこそ、メトラカトラへ。私はテオ・マッキンタイヤー、この美しい村で生まれ育ちました。これから村を案内し、私たちの踊りとサーモン・ベイクを楽しんでいただきます」。テオはふだん、ヘッド・スタート（幼稚園のようなもの）に勤めており、夏休みのこの時期はガイドに早変わりだ。マイクは要らないほどよく通る声で、自己紹介と村の歴史を語り始める。

ツィムシヤンは、もともとカナダのブリティッシュ・コロンビア州北部のスキーナ川とナス川の下流域に暮らす民族で、北西海岸インディアンと総称される人びとの一グループである。一八八七年に宣教師のウィリアム・ダンカンが伝統にとらわれない理想的な社会をめざして、カナダから約八三〇人のツィムシヤンたちを連れて移住し、この村を作った。

ダンカン師は合衆国政府と掛け合い、時のクリフブランド大統領にアネット島をアラスカ州で唯一のインディアン保留地（リザーベーション）として認めさせた。以来、議会や税制度などをはじめ政治・経済・社会面での自治体とは異なる制度がしかれて



港に入ってきた水上飛行機一



一加工場のすぐ横につけた船にはパイプがのばされ、海水とともに魚が吸い上げられる

いる。また、一九七一年に制定された「アラスカ原住民要求解決法（略称ANCSA）」は、先住民の組織化や土地所有と補償、文化財調査等を認め援助するなどの内容が盛り込まれたものだが（本誌二六号参照）、メトラカトラはこれに参加せず、独自の道を歩んでいる。例えば、早くから水産加工業や林業で日本企業との取引があり、技術援助を受けながら住民が主体となり経済を支えてきた。そんな彼らのチャレンジ精神は今も受け継がれている。

説明を聞くうちに、ダンカン師の自宅を利用した博物館の前に到着した。中ではキューレーター（学芸員）の帕特・ビールがにこやかに迎え入れる。パットはアラスカ大学フェアバンクス校で学び、村に戻って教員をしたのち、このツアー組織のディレクターと博物館の仕事とを兼任している。

彼女は、私の回していたビデオカメラにちらちらと目を向けながら最初は少し緊張した面もちだった。ダンカン師の生い立ち、カナダからの移住の経緯、布教と生活文化の改善、新たな経済活動基盤の整備などなど、事細かに説明を続ける。奥へ進むと、教室として利用された部屋には古い黒板があり、何十年も前の子どもたちの絵などが展示されている。それらを丹念に見

て質問をする観光客たちを相手に、パットもついつい説明に熱が入ってしまったようで、ガイドのテオは腕時計を指さしながら（もうそろそろ切り上げて）と声を出さずに合図する。

一〇時三〇分。薄暗いダンカン博物館から外に出ると、太陽の光が目眩（まどろみ）しい。テオはツアー客らが頭に被る白いネットを一人一人に手渡す。これから行く向いの水産加工場が、いかに衛生に気を配っているかをアピールするため。そして自分は野球帽を被り直し、「アネット・アイランド・パッキング・カンパニー」の説明を始める。

サケの缶詰工場としてスタートしたこの会社が、現在はサケを中心にウニ、ナマコ、オヒョウなど魚介類の加工をしていること、若い人たちがここで学費を稼いでいることなどを話した。

加工場内は、洗浄し、切り身を作るライン、卵をほぐして「いくら」と書かれたプラスチック容器に詰めていくライン、凍った魚の重さを計り、箱詰めするラインなどに分かれている。ベルト・コンベヤーの音、水の音、ラジオから流れる音楽で、とても騒がしい。黙々と働く彼らのビニール製のエプロンにはカタカナで「マイキエル」などとマジックで書かれた文字が見える。工場内で一緒に働いている日本人

が、それぞれの名前を書いたのだらう。ツアー客の中には『いくら』は日本へ輸出されるんでしょう？」と私たちに声をかけてくる人もいる。

生産ラインをひと巡りすると、次に工場の敷地内にあるギフトショップに誘導される。スモークサーモンや「パッキング・カンパニー」のロゴがプリントされたTシャツ、キーホルダーなどが並べられている。店内は狭く、いつもは店番一人でのんびりした雰囲気なのが、にわかに忙しくなる。

テオは木箱に入った缶詰セットを手にも、「これはこの工場で作られたスモークサーモンの缶詰です。箱にプリントされているのは、これからご案内するロングハウスの壁に描かれた私たちの祖先と関係の深い四つの動物、ワシとワタリガラスとオオカミとシヤチです。これをデザインしたのは、この村のアーティストのウェイン・ヒューソン。彼はダンスチームのメンバーでもあります。レッド・シーダー（ヒノキ科）製の箱は・・・、うーん、いい香り」と匂いを嗅いで宣伝する。

一一時三〇分。再びバスに乗り込み、役場、学校、ダンカン教会など村の主要な施設の前を通ってロングハウスにたどり着く。小さな村は、ゆっくり走っても五分ほどで見て回れる。



ロングハウスの背面。向かって右半分がワタリガラス、左半分がワシ、下部はオオカミ、全体がシャチを表す。



一踊りに加わるツアー客ら。左側のダンサーたちはボタンブランケットをまとっている。

ロングハウスの前には三本のトーチムポールが建っている。中は体育館のように広い板張りのスペースで、三方は階段状の客席になっている。客たちはそこに腰掛けて、ボックス・ドラム（箱形の太鼓）や天井から吊された大きなカヌーを見回す。テオはすばやく着替えて、樹皮製のバスケット帽を被り、ボタン・ブランケット（属するクランの動物をデザインしたアププリケとボタンで飾ったマント）をまとった姿で登場した。「これから私たちの歓迎のダンスをお目にかけます」。その声を合図に同じような衣装を身につけた一〇人ほどのダンサーたちが会場に入ってきた。鳴り響くドラムの音、のびやかな声のツィム・シャンの歌、激しい動きのダンス。一曲終わるごとに、観客からは拍手が浴びせられる。

踊りの途中で、ダンサーたちは手に持ったシーダーの枝を客の一人一人に配ったりとサービスも満点。テオが四つの動物名を順々に呼び上げると、それぞれのクランのダンサーたちは羽を広げたワシや潮を吹くシャチというように、動物の動作を真似た踊りを披露する。彼らが舞った後、「バタフライ（チョウ）！これは春に来て秋に帰っていく旅人のあなた達のことです」と観客らも呼びかけられる。すると顔を

見合わせながらも、チョウの仕草で踊りの輪に入っていくのだった。

踊りが終わって客席に戻ると、テオの「ありがとう」の声に再び拍手がわき起こる。「このあと、外のバーベキュー・コーナーでお食事をしていただきますが、後ろのテーブルには村のアーティストたちが作った工芸品などが並べられています。どうぞご覧になっていって下さい」と言って、彼女は会場を出る。テーブルには製作者たちががついていて、ロングハウスの壁のデザインをしたウェインも、ダンス衣装のまま自分の木彫などを手に客たちと話をしている。

そのうち、一人二人とロングハウスを出て、食事が始まった。紙皿に取り分けられた網焼きのサケをメインに、サラダ、パンと冷たい飲み物といった、いかにもアメリカらしいランチだ。客たちは楽しげに会話を交わす。食事を終えてバスに乗り込む際に、一人に一つずつスモークサーモンの缶詰がおみやげにと渡された。ロングハウスの背にあたる方に回り込み、壁の絵を目に焼き付けたあと、港に戻って待機していた水上飛行機に乗り込む。笑顔で手を降る観光客たちは、メトラカトラで何を感じとっていったのだろうか。午後一時三〇分。フォークダン

ス愛好会という熱心な客たちを迎えた今回のツアーは、約四時間といつもよりやや長い時間をかけて終わった。

* * *

カナダ北部のプリンス・ルパートとジュノー、シトカなど東南アラスカの主要な町を結ぶ大型フェリーの旅は、その寄港地ごとにオプショナルツアーが用意されている。ケチカンでは「ネイティブ・ビレッジ・ツアー」と呼ばれるメトラカトラへのこのツアーや、トーチム・ポールの林立する公園と博物館やサケの孵化場をめぐる「トーチム・ヘリテージ（遺産）・ツアー」などの先住民文化を主体にしたものがある。また、釣りや野生動物、氷河を見る「アドベンチャー・ツアー」等のプログラムもある。メトラカトラへのツアー参加者は今のところ年間わずか五〇〇〜六〇〇人。しかし、関係者によると今年からアネット島へのフェリーの直接乗り入れが増えるのに合わせて、工芸館を建設するなど、ツアー客の倍増を見込んでいると言う。アーティストの養成にも熱心だ。水産加工品や木材の輸出の減少に悩むこの村にとっては、観光は将来的に期待される産業なのだ。彼らの挑戦は続いている。

*この調査は平成一〇年度文部省科学研究費（国際学術研究・課題番号10041029）研究代表者岡田淳子によるものである。